

# 地名の由来と史跡と文化財

## 三和地区（海上編）



三和地区新生山祇神社鳥居

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会会員）

令和2年11月編集・製作

## まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちほら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社と思われますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社と思われます。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていいますが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われている。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「三和地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



## 市原郡内の三和地区の地名の由来

### 千葉県の名の由来

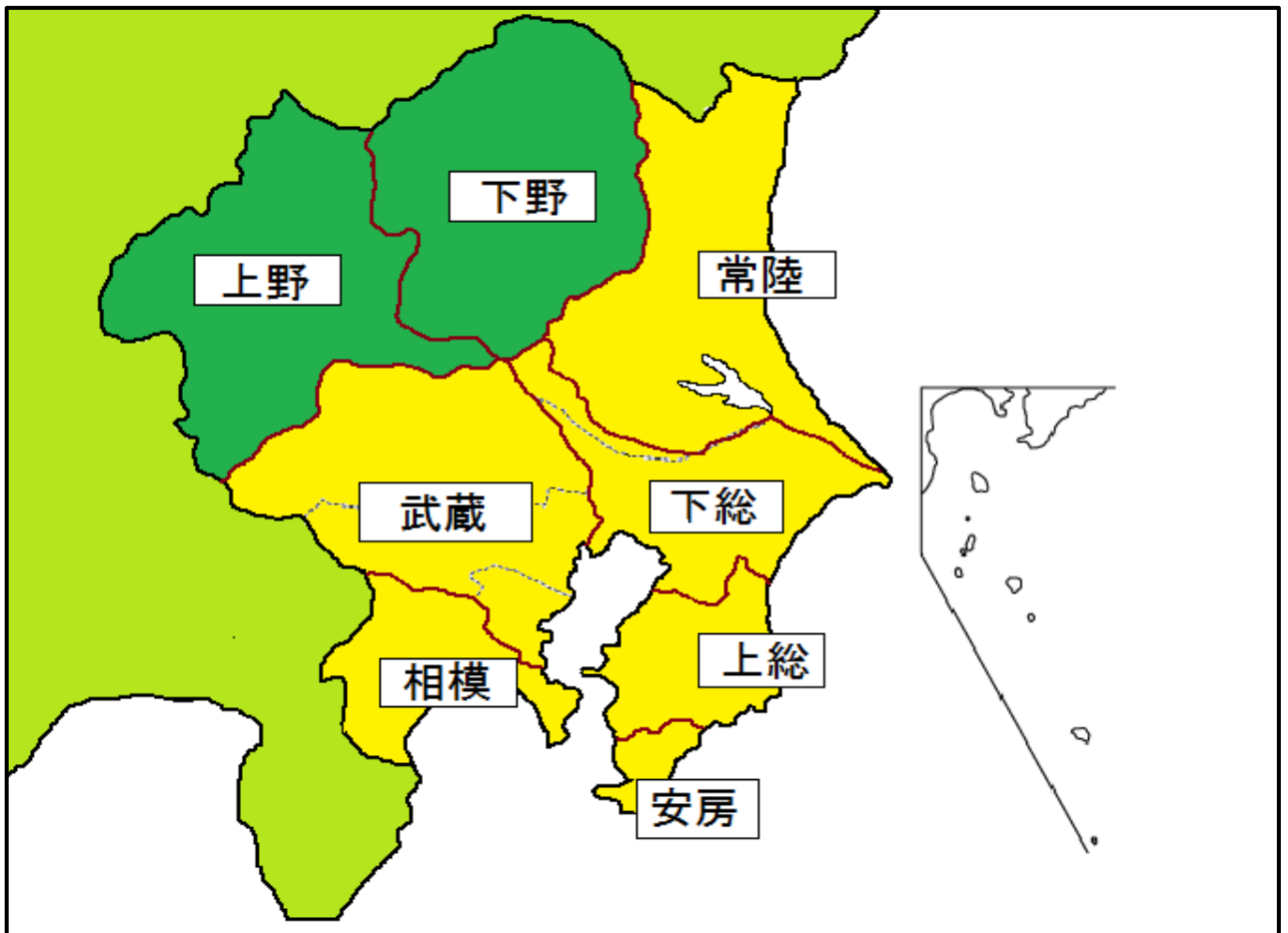
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

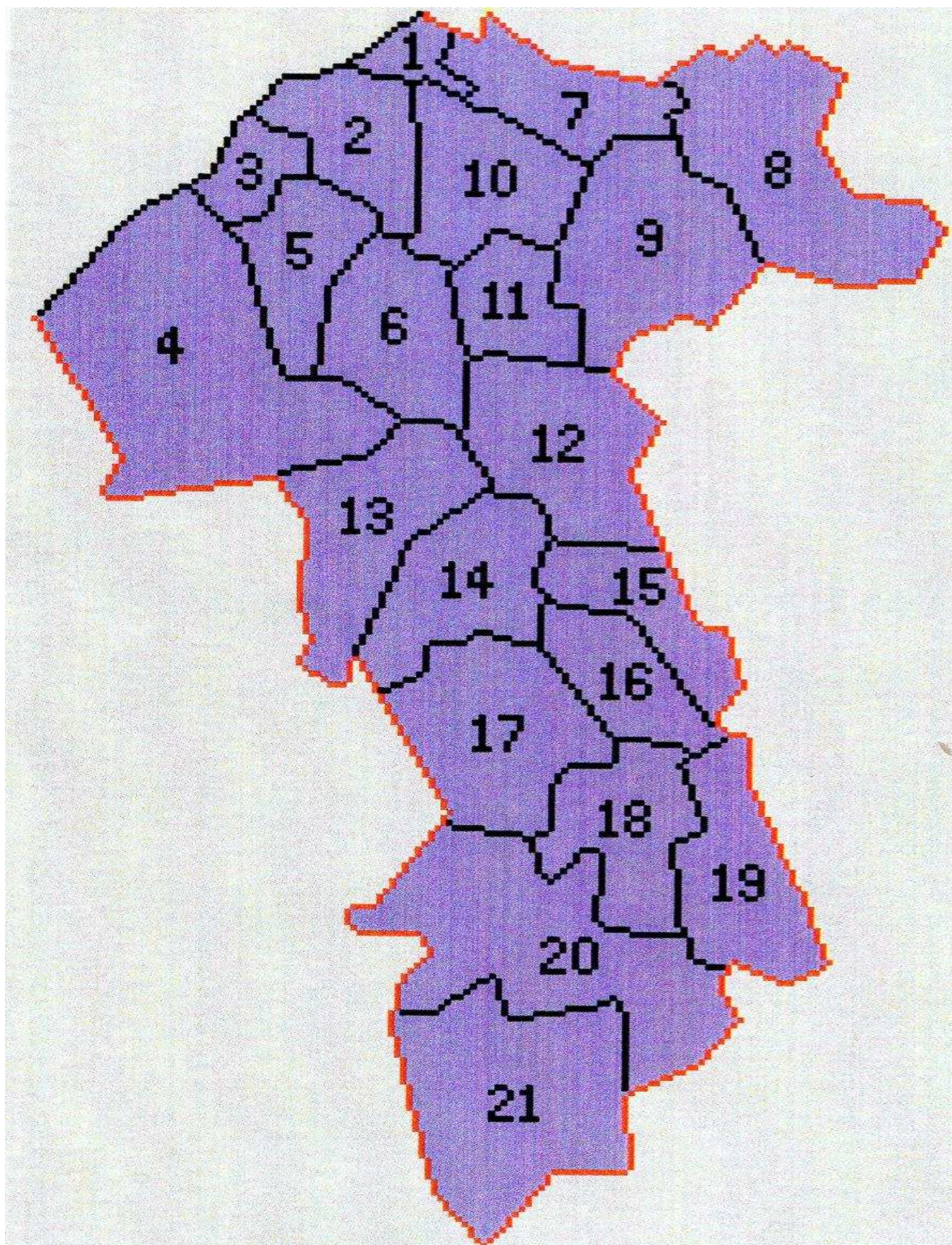
下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原



# 市原市の地区別地図



町村名	1・八幡	2・五井	3・千種	4・姉崎	5・東海	6・海上	7・菊間
	8・市東	9・湿津	10・市原	11・市西	12・養老	13・戸田	14・牛久
	15・内田	16・鶴舞	17・高滝	18・富山	19・平三	20・里見	21・白鳥



## 市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

### 上総国市原郡の6郷

#### 1・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

#### 2・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

#### 3・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な湧泉があることから命名された地名と思われる。

#### 4・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

#### 5・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

#### 6・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

## 海上地区（浅井小向・安須・新生・系久・高坂・権現堂・宮原・分目）

### 概説

この地域の沿革については既に古墳時代（上海上国）に表れている。上海上国の中心は、一時期今富付近にあったと思われ、市内最大級の前方後円墳（塚山古墳）が存在する。また、市内最古の寺院跡の一つに「今富廃寺」（7世紀後半）があることなどがそれを裏付けるものです。

上総国府の設置に伴い、海上郡に属した。当時、国府と国府を結ぶ道は各郡の群家を経由したところから、海上郡の郡家は、現在の小折の地であろうと思われる。現在海上小学校のある台地は「神代城」の二の丸跡であると思われ、戦国時代の城主は椎津城の武田氏に従っていた小豪族であると言われている。その後、里見氏の支配となる。北条氏綱と関東の支配権を争っていた関東管領山上杉憲房が没すると、管領職を継いたが、後にその職を憲政に譲り、自らは里見氏を頼り宮原に隠棲し、名も足利晴直と改め、居館を宮原御所（現明照院）と称したという。明治維新前は、ほとんどの地が幕府領か旗本の知行であった。

明治元年（1868年）7月房総知県事柴山文平の支配となり、同年12月に菊間藩に駿河国沼津城主水野忠敬が転封され、その所轄となる。同年4月廃藩置県により木更津県、同6年に千葉県、同年11月に郡区町村編制法により千葉市原郡役所に属し、3つの村連合を組織した。同22年市町村施行法により、現在の海上地区及び東海地区の一部から成る海上村が成立し、役場を分目に置いた。

その後昭和30年、海上村、市西村、養老村が合併し三和町となり、同31年から32年にかけて今富村・小折村・柳原村・十五沢村・西野村・神代村は五井町に編入）が成立した。

海上村の地名の由来は、市原郡の中部の上海上国造の支配地にちなむものと思われる。

「三和」の地名の由来は、三村和合の願いを込めて「三和町」と名付けた。



浅井小向 (あさいこむかい) 神社・寺院・史跡・城址 諏訪神社・日吉神社  
真蔵院(真言宗豊山派)・正善院(真言宗豊山派)

戦国期は浅井村。江戸期は浅井小向村。

地名の由来は、「あさ(崖)・い(川)・こ(接続語)・めけ(剥ぐ)」の転訛で、養老川の曲流部に位置し川流により土地が削られることを指したもの。

諏訪神社 (すわじんじゃ)

所在地 市原市浅井向井字郷中69番地

創建時期 天応元年(781年)

祭神 建御名方命・八坂刀売命

官司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。天応元年に信州諏訪大社より勧請。境内に山祇神社(猿田彦命)・熊野神社(伊弉册尊)・八幡神社(誉田別尊)・天満宮が祀られている。



諏訪神社の拝殿正面



文化8年の築造の石造鳥居



天満宮の石の祠



八坂神社の祠

日吉神社 (ひよしじんじゃ)

所在地 市原市浅井小向字久保実317番地

創建時期 不詳

祭神 大山咋命

官司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社、往古、浅井諏訪神社の末社であつたが、氏子の崇敬により創建。大正12年の震災で社殿倒壊、昭和2年に再建した。



浅井小向日吉神社の本殿・狛犬



日吉神社の入口の鳥居



本殿を左側



左から道祖神・金毘羅権現・子安大権現・不明



**真蔵院 (しんぞういん) 真言宗豊山派**

**所在地** 市原市浅井小向字郷中70番  
**創建時期** 不明ですが、江戸期にはあった。  
**本尊** 不明  
**住職** 川俣 弘潤  
**由緒・伝説** 江戸時代に市原郡四国八十八か所霊場の十四番札所として巡礼の地であった。



真蔵院の本堂



市原郡八十八か所十四番札所の石碑

**正善院 (しょうぜんいん) 真言宗豊山派**

**所在地** 市原市浅井小向218番地  
**創建時期** 不詳  
**本尊** 不詳  
**住職** 田中 敏弘  
**由緒・伝説** 市原郡四国八十八か所霊場の21番札所として江戸期にはあった。



正善院の本堂



入口左側にある弘法大師石造



かなり歴史を感じる墓地の石碑

**安須 (あず) 神社・寺院・史跡・城址 日枝神社・正壽院(真言宗豊山派)・安須城址**

江戸期は安須村。地名の由来は、過去に地滑りなどの自然災害にあったことを意味する。

**安須日枝神社 (ヒエジンジャ)**

**所在地** 市原市安須字上の山756番地  
**創建時期** 不詳  
**祭神** 大己貴命



宮司 露崎 のり子

由緒・伝説 境内に八坂神社（素盞鳴命）稲荷神社（保食命）が祀られている。



日枝神社の本殿と狛犬・石灯籠



神社入口の鳥居と急階段の参道



境内の子安神社の社

正壽院（しょうじゅいん） 真言宗豊山派

所在地 市原市安須745番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 金子 研一

由緒・伝説 市原郡四国八十八か所霊場の24番札所でしたが、明治に寺子屋を開設し、その後に海上小学校安須分校となり、本堂などは取壊されたので現在は児童公園となっている。



入口にある弘法大師像



寺院跡地の石仏

海上小学校安須分校の正門の表札



安須分校跡地の児童公園

安須城跡（あずじょう）・高坂城址（こうさかじょう）

所在地 市原市安須

築城時期 戦国期

築城主 佐是城の支城で、家臣が守っていたと思われる。

説明 実際の城名は、ラフ図の中央部分の牧場を挟んで北側が「安須城」、南側が「高坂城」です。両城の間は100mほどの距離で、南北両方に城郭遺構らしきものが見られる。

安須城は台地基部に堀切状の切通しによる区画があり、内部がきちんと削平





された2段の平場になっていることから、小さいながらも一応城郭として認められる。要害という地名も残されている。安須城は、臨時に急造されたものか、物見の砦程度の目的で築城されたと思われる、いずれにせよ恒久的な城郭ではないと思われる。城の規模は、二つ合わせて長軸50m程度の物であり、居住を目途にしたものではないと思われる。ただ、堀切を挟んだ北側台地の西側には南北に長く、浅い堀状の部分が見られる。これがあるいは堀の名残りであるならば、実際の城域はかなりの大きさをもっていたと思われる。

次に、南側の高坂城ですが、台地先端に近い部分に周囲を囲まれたAの部分があり、これが城らしい構造と思える。このA部分は、6m×20mほどの極めて小さな空間ですが、これをもって独立した城郭とするには無理がある。これを独立した構造物とするならば周溝墓の一種か、あるいは宗教的な空間と思える。あるいは、台地下に続く切通しの通路によって生じたものか。ただ、周囲の堀は城の物と思われる。この台地下から上がってくる切通しの通路が2か所見られるが、切通しの規模は小規模なもので、Aの周囲の堀の大きさとはかなり差がある。これら2つの遺構はAの部分は単独で城郭を構成すべきものではないが、かつてはもっと大きな城郭の一部と仮定すると、中央の牧場部分が城の中核部分であり、後世の牧場の設置によって地形が改変されたと思われる。また、城の南端部分にあった二重堀、または馬出し状の郭だけが破壊を免れて残存していると思われる。

これら2つの遺構は共通する城の一部であり、本来の「要害」は「安須、高坂」の両地域をまたがるものとなるので「安須城・高坂城」どちらの名を使っても間違いではないと思われるが、これはあくまで想像のものです。

この台地には、あちこちに古墳らしきものが点在しており、古くから高地性の集落があった場所と思われる。



養老川沿いから見た安須城



安須城の堀切 3 m × 6 m



安須城の2郭跡。向いは1郭



高坂城のA部分南側の城壘と堀



Aの部分の北側の堀。3 m × 6 m



Aの部分の南西側の古墳



新生（あらおい） 神社・寺院・史跡・城址 山祇神社・祐巖寺（曹洞宗）

江戸期は新生村。里伝によれば文禄年間（1592年～1590年）は新生郷と称し、後に糸久・権現堂十五沢を分村した。

地名の由来は、「あら（荒）・う（～になっている場所）」の転訛で、新たに土砂崩れて崩壊地となった所と言う意味か。

山祇神社（やまぎじんじゃ）

所在地 市原市新生字岩淵525番地  
創建時期 不詳  
祭神 面足尊・惶根尊・応神天王  
官司 和田 武章  
由緒・伝説 旧村社。応神神社を（字川間）を合祀。  
明治21年（1888年）白幡神社を境内に遷宮。  
大正3年（21914年）応神神社（字川間：応神天皇）を合祀した。



神社入り口の朱色の鳥居と奥の拝殿



拝殿の正面



左側は本殿、右側は拝殿



本殿内部に内宮が祀られる

新生山祐巖寺（あらおいさんゆうげんじ） 曹洞宗

所在地 市原市新生539番地  
創建時期 不詳  
本尊 不詳  
住職 武藤 秀樹  
由緒・伝承 不詳



祐巖寺の本堂全景



祐巖寺の朱塗りの山門



本堂の正面入口と扁額



山門の左右には地蔵が祀られる

系久 (いとひさ) 神社・寺院・史跡・城址 諏訪神社・円乗寺(真言宗豊山派)

鎌倉期は系久村。江戸期も同じ。文禄年間(1592年~1596年)以後新生村から分村して成立。  
地名の由来は、「いた(痛・く(処))の転訛で、土砂崩れ、または養老川の氾濫で被害を受けた地という  
意味か。」

諏訪神社 (すわじんじゃ)

所在地 市原市系久字関嶋342番地  
創建時期 不詳  
祭神 建御名方命・八坂刀売命  
宮司 和田 武章  
由緒・伝説 旧村社・創建年代・由緒不詳。境内に  
白山神社(伊弉册命)・日枝神社(大山咋命)  
八幡神社(誉田別尊)・天満宮などが祀られる。



諏訪神社の本殿正面



諏訪神社の左側



境内敷地内の出羽三山の供養塚

円乗寺 (えんじょうじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市系久320番地  
創建時期 不詳  
本尊 不詳  
住職 田中 俊弘  
由緒・伝承 市原郡四国八十八か所霊場の  
9番札所となっている。  
国道297号のバイパスのために移築された。



円乗寺の本堂正面



本堂正面と円乗院の扁額



境内の移設された歴代の墓地



高坂（こうさか） 神社・寺院・史跡・城址 玉前神社・薬王寺（真言宗豊山派）

江戸期は高坂村。地名の由来は、「たき（急傾斜地）・さか（坂）」の転訛で、急傾斜地という意味を2回用いて意味を強調している。

玉前神社（たまさきじんじゃ）

所在地 市原市高坂387番地

創建時期 不詳

祭神 玉依姫命

宮司 露崎 のり子

由緒・伝説 旧村社・通称玉前様。創建年代・由緒不詳。現在は火災により焼失し社殿は取り払われた状態で、再建のため工事中になっている。

境内に八坂神社（素盞鳴命）・疍瘡神社（大己貴命）が祀られている。

薬王寺（やくおうじ） 真言宗豊山派

所在地 市原市高坂227番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 金子 研一

由緒・伝説 市原郡四国八十八か所霊場の23番札所となっている。



薬王寺の本堂全景



宝塔の石柱



境内内の墓地。歴代住職の墓地か

権現堂（ごんげんどう） 神社・寺院・史跡・城址 八坂神社・満蔵院（真言宗豊山派）

江戸期は権現堂村。文禄年間以降（1592年～1596年）新生村から分村して成立。

地名の由来は、権現を祀ったことにちなむ。

八坂神社（やさかじんじゃ）

所在地 市原市権現堂字宮ノ前16番地

創建時期 不詳

祭神 高皇産霊神・神皇産霊神

宮司 和田 武章

由緒・伝説 村社・創建年代、由緒不詳。



権現堂八坂神社の拝殿正面



本殿正面の石製の鳥居



左脇に建てられた朱塗り鳥居



本殿前右側にある手水鉢

満蔵院 (まんぞういん) 真言宗豊山派  
 所在地 市原市権現堂24番地  
 創建時期 不詳  
 本尊 不詳  
 住職 田中 顕文  
 由緒・伝説 市原郡四国八十八か所霊場の  
 16番札所となっている



権現堂満蔵院の本堂正面



本堂左側



歴代住職の墓地か。石仏が安置



境内の周囲には墓石が並ぶ

宮原 (みやはら) 神社・寺院・史跡・城址 大国主神社・明照院(真言宗豊山派)

江戸期は、宮原村。枝郷として西野村。古河公方7代源政氏の4男足利晴直(義舜)は、この地に隠棲し「宮原御所」と称したが、死後侍臣がこの地に一字の堂を開き、御所山薬王寺明照院として残した。

地名の由来は、「みや(御屋)・ばら(原)」で、神社のある原野という意味。

大国主神社

所在地 市原市宮原字大フク436番地  
 創建時期 不詳  
 祭神 大国主命  
 宮司 和田 武章  
 由緒・伝説 旧村社、創建年代・由緒不詳。  
 大正3年(1914年)大鷲社・  
 八幡神社・浅間神社・白山神社  
 を合祀。



宮原大国主神社の拝殿正面



大正12年(1923年)関東大震災により社殿倒壊、後に再建された。境内に合祀した合祀した八幡神社の境内社であった八雲神社が祀られている。



大国主神社の鳥居



神社本殿(左)と拝殿(右)



石製の手水鉢



大鷲神社(左)八坂神社(右)



左側は白山神社



子安神社(左)の祠

御所山薬王寺明照院 (ごしょさんやくおうじめいしょういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市宮原神田454番地  
 創建時期 天文4年(1531年)  
 本尊 不詳  
 住職 廣瀬 秀明  
 由緒・伝説 足利晴直が当地に宮原御所を造営して住んでいたという。その後晴直が亡くなったため、侍従が追福のために当寺を建立、敷地内の北方に小祠があり、御所明神と呼んでいる。足利晴直を祀っている。



明照院の本堂正面



明照院の山門、左右に石碑が



境内に築かれているお堂





山門右側の石碑群



弘法大師を祀ったお堂か？



北西にあるかなり古い墓石群

### 宮原御所跡 (みやはらごしょあと)

宮原の明照院が御所跡と呼ばれている所です。宮原御所の山門脇には土塁が伸びていて、道路との間に明確な区画性を感じる。さらに寺院の東、南、北の三方向は、比高5mほどの土手となっていて、寺院のある所が東側に突き出した地形であることが分かる。このようなことから、40m×60m程と、小規模でありながら、宮原御所にはかなり明確な区画性があったことが理解できる。この寺院の境内がそのまま居館の跡であったと見て良いと思われる。寺院の北西側には墓地があり、中にはかなり古い五輪塔などもあり、これが城主に關係する墓地ではないかと思われる。

足利晴直について調べると、「関八州古戦録」にある巻1のはじめの方に「山内、扇谷両上杉家の事」という項目があり、そこに次のような話が記されています。山内上杉憲房は子供がなかったので、古河公方足利氏の子、賢壽丸憲寛を養子とした。しかし家臣たちが山内と地のつながりのない憲寛を軽んじた為、享徳4年に世をはかなんで、わずか9歳の憲政に家督を譲って引退した。その後は里見義堯に身を寄せて、上総国市郡宮原に隠棲し、本姓に復して足利左馬頭晴直と名乗り、治乱を避けて余生を送ったと言われています。この足利晴直こそが「宮原の御所様」と呼ばれた人物です。

「日本地理史料」では「天文年間に足利義舜(あしかがよしただね)がこの地に居住していた」という。彼の子孫は宮原氏を名乗り、後に江戸幕府の高家になったというが、この人物が足利晴直の事なのかは不明です。



西側中央に土塁の切れがある



西側の土塁を外側から見たところ



分目 (わんめ) 神社・寺院・史跡・城址 雷公大明神・慈眼寺(真言宗豊山派)・分目要害  
 江戸期は分目村。地名の由来は、「わけ(分村した子村のこと)・め(間)」で、分村した子村と親村の間に位置することにちなむものか。

**雷公大明神 (らいこうだいみょうじん)**

所在地 市原市分目 266 番地  
 創建時期 不詳  
 祭神 別雷神  
 宮司 和田 武章  
 由緒・伝説 創建年代不詳。勧請時期は不明ですが、日吉神社((字西本村:少彦名命)大鷲神社(字雲間:日本武尊)浅間神社(字堂谷:木花之開耶比賣命)を合祀。



雷公大明神の本殿



参道の鳥居と本殿に続く階段



鳥居の上には雷公大明神の扁額



拝殿の中に本殿の内宮が祀られる

**慈眼寺 (じがんじ) 真言宗豊山派**  
 所在地 市原市分目 193 番地  
 創建時期 不詳  
 本尊 不詳  
 住職 田中 俊弘  
 由緒・伝説 市原郡四国八十八か所霊場の15番札所となっている。



慈眼寺の本堂全景



古い時代の宝塔



弘法大師の石像



分目要害城 (わんめようがいじょう)

所在地 市原市分目字要害

築城時期 戦国期と思われる

築城主 分目氏と思われるが村上氏や椎津氏が城主であった可能性が高いので、分目氏はその一族ではないかと思われる。

説明 分目要害城は、県道13号線の南側の低湿地にあった。慈眼寺や雷公大明神の西側一帯にあったと思われます。かつてはここには「ゆうがい山」と呼ばれる低い台地が存在し、幅広い堀で区画された郭が存在していた。遺構が破壊されたのはかなり古い時代のことです。

概念図によると5郭程が認められ、かなり整った形の城であり、馬出しのような郭もある。



戦国期に大改修された台地先端部。中央の帯は発掘調査地で、地下式杭が点のように見える



正面右側に見える土塁遺構



北側から見た5mほどの1郭城塁



東門の辺りに残る堀跡の部分



- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
- ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
- ・全国遺跡報告総覧
- ・日本の城郭・城址（千葉県版）
- ・八百万の神
- ・市原市・宗教法人一覧
- ・かずさ国府はどこ？
- ・市原の城郭と国府跡をたずねて
- ・Wikipedia- 市原郡
- ・市原市歴史と文化財シリーズ
  - ・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

## 三和地区の地名の由来と史跡と文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満 1020 番地 1

連絡先 090-3545-1113